

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 9 月 6 日現在

機関番号：32418

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H03997

研究課題名(和文) 障害者スポーツのリバースインテグレーションによるインクルーシブスタンダードの開発

研究課題名(英文) Development of Inclusive Standard via Reverse Integration of Para-Sports in School-aged children

研究代表者

海老原 修 (EBIHARA, Osamu)

尚美学園大学・スポーツマネジメント学部・教授(移行)

研究者番号：50185138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：障害者スポーツに健常者が参画するリバース・インテグレーションをアイマスクを伴うブラインド・ウォーキングやジョギングとゴールボール、車いすバスケットボールの出前授業を横浜市立学校の児童生徒を対象に開講し、彼らの障害者やマイノリティへの対応すなわちインクルーシブ・スタンダードの変動を3か年、追跡的に調査した。この統制群に対して障害者スポーツの未体験者を同年代に求め、その変動も追跡的調査にて比較検討した。また、両群の継続的な比較分析にて確認されるインクルーシブ・スタンダードの妥当性を、インクルーシブ・スタンダード項目を含めた児童生徒と同じ調査票を成人を対象にインターネット調査の実査を通じて確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では障害者やマイノリティにたいするインクルーシブ・スタンダードに知識・理解、関心・意欲、態度・行動の3指標を設定し、障害者スポーツを体験した児童・生徒の変動を同定した。障害者スポーツの高度化は科学技術の発展とともに進展するが、その成果は特別支援学校での発展にとどまり、通級や一般教室での体育における身体欠損児と担当教員の応答「できることだけやりなさい」は両者の免罪符となり、体育プログラムの体系化は未成熟な現況にある。学校教育におけるリバース・インテグレーションの実践はかかる現状を打破する端緒となり、インクルーシブ・スタンダードによつて的確に評価し、インクルーシブ教育の進展を顕在化できる。

研究成果の概要(英文)：School-aged children who participated in Para-Sports programs from 2019 to 2021 were engaged in longitudinal surveys. A fixed alternative questionnaire contained of twelve items concerning to their activities of handicapped persons and minority and 12 Para-Sports was conducted to such experienced-children and non-experienced. Inclusive Standard was identified in twelve activities of handicapped persons and minority, such as (1)walking cane or put on a cane, (2)a prosthetic leg or an artificial leg, (3) a prosthetic hand or an artificial hand, (4) walking white cane or put on a white cane, (5) wheelchair users or people in wheelchair, (6) hearing aid user or wear a hearing aid, (7),talk in sign language (8) oxygen inhaler user, (9) pregnancy badge or maternity sign, (10)guide dog user, (11) foreigner, (12) LGBTQ.

研究分野：スポーツ科学

キーワード：障害者スポーツ リバース・インテグレーション インクルーシブ・スタンダード 縦断的追跡調査

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は教育基本法やスポーツ基本法が保障するところの、障害をもつ児童・生徒が健常児と等しく教育を受ける権利を履行しているのかを問う挑戦的な試論と位置付けられる。障害者スポーツは、障害による不可視な区分を可能な限り可視的に取り扱う身体表現をとまなう挑戦であり、必要最低限の条件整備となる応戦を超え、多種多様な障害をさらに乗り越える可能性をもつ。とりわけ、健常者が障害者スポーツに挑戦するリバース・インテグレーションは、周辺にいる障害者の存在を初めて認識せしめる可能性を有し(Awareness)、障害者と日常生活を共に過ごす公共性を分かち合う心性を刺激し(Share)、自らの余力を不足する人物に提供する意欲・心意気を喚起し(Sprite)、実際の行動として顕在化させる(Behavior)と期待される。

図1に今日の障害者スポーツを取りまく組織・人材・所管部局(関連法)を示した。障害児・者への社会資本・支援における、いわゆる縦割り行政を念頭とすると、障害者スポーツをめぐるそれは2020東京オリンピック・パラリンピックをめざす文部科学省スポーツ庁への一元化によって統括をすすめる。

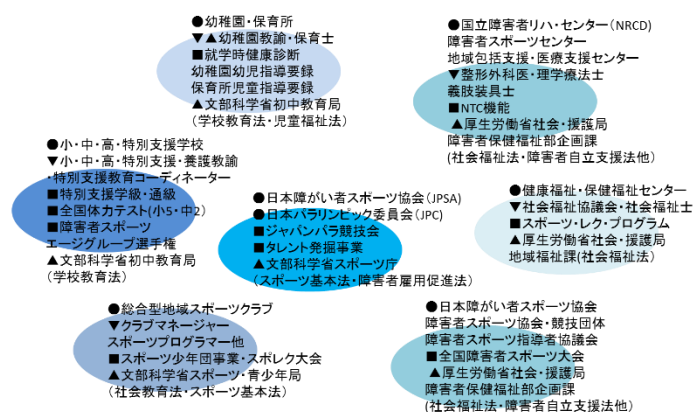


図1. 障害者スポーツを取りまく組織・人材・所管部局(関連法)

(●組織 ▼人材 ▲所管部局)

2. 研究の目的

本研究の目的は、学校体育への障害者スポーツ導入が、①児童生徒の教育基本法やスポーツ基本法の理念と実践への理解・遵法にかんする学習効果を喚起するか、②普通学級に在籍する身体欠損児のスポーツ・キャリア形成にいかん資するか、③インクルーシブ教育の推進プログラムとなり得るかを検討することである。障害者スポーツの高度化は科学技術の発展とともに進展するが、その成果は特別支援学校での発展にとどまり、通級や一般教室での体育における身体欠損児と担当教員の応答「できることだけやりなさい」は両者の免罪符となり、体育プログラムの体系化は未成熟な現況にある。学校体育への障害者スポーツの導入によるリバース・インテグレーションの実践はかかる現状を打破するとともに、身体的な教育のもつ波及効果がインクルーシブ教育の推進に顕在化する可能性を秘める。これを実証するためには、多角的な観点別評価指標となるインクルーシブ・スタンダードを開発し、妥当性や信頼性を確認した上で、追跡的な効果分析が必須となる。

3. 研究の方法

平成29(2017)年度の障害者・障害者スポーツ認知・意欲・行動調査票を基礎に、(1)インクルーシブ教育にかかわる小中高教員、障害者スポーツ関係者、社会福祉関係者へのヒアリングに基づく知見を加えたインクルーシブ・スタンダードの妥当性を検討し、(2)横浜市教育委員会ならびに神奈川県教育委員会の協力を得て、小学校、中学校、高等学校等での障害者スポーツの体験授業を開講し、(3)上述(1)に基づく調査票「障害者・障害者スポーツ認知・意欲・行動比較調査」を作成し(図2・図3参照)、(4)障害者スポーツとなるブラインド・ウォーキングや車椅子バスケットボールを導入した実験校の特異性を対照校との比較の上で分析する。その変容過程を分析するべく追跡調査を実施する。

令和元(2019)年度から令和3(2021)年度の3か年にわたる追跡調査を含めた、調査への

参画に協力された対象区分は（1）横浜市立小中学校、（2）埼玉県公立小中学校、（3）東京都私立小中高、（4）横浜市私立中高、（5）Web 調査、である。コロナ禍前年となる令和元（2019）年度に、横浜市教育委員会、横浜市小学校校長、横浜市中学校校長会などの協力の下、横浜国立元街小学校、宮谷小学校、北山田小学校、東山田小学校、一本松小学校、葛野小学校、菊名小学校、白幡小学校、下野庭小学校、横浜商業高等学校、若葉台特別支援学校にて、ブランドマスクを着用するウォーキングやジョギングならびにゴールボール、車いすバスケットボールを児童・生徒が体験する障害者スポーツ体験プログラム出前授業を開講した。令和元（2019）年度末に3カ年にわたる追跡調査にかかわる、①依頼状、②調査票、③返信用封書を、出前授業を体験した学年の全児童の保護者宛てに当該の学校より児童が持ちかえる形式にて配布した。

この横浜市立小中学校での障害者スポーツ体験プログラムの効果を検証するために、当該学年相当の年齢を対象とする、①埼玉県公立小中学校、②東京都内私立小中学校、③横浜市内私立中高への3カ年の追跡調査を依頼した。具体的な作業依頼は、3カ年の追跡調査を確保するために、①では対象児童を小学1年生から中学1年生を、②では小学1年生から高校1年生を、③では中学1年生から高校1年生を対象とした。調査票はインクルーシブ・スタンダードにかかわる12項目とリバース・インテグレーションにかかわる12項目に、フェースシートとなる学校名、学年、年齢、性、運動・スポーツ実施頻度を加えた調査票を作成した。

さらに、インクルーシブ・スタンダード開発に際して、その妥当性と信頼性を検証するべく、令和3（2021）年度に、教職員・福祉職員1200名ならびに一般・学生1200名を対象とした日常生活での障害者・マイノリティへの対応12項目におけるリバース・インテグレーション体験者別に、「見たことがある」（知識・理解）、「手伝おうとしたことがある」（関心・意欲）、「手伝ったことがある」（態度・行動）にかんして、それぞれでクロス集計値とカイ二乗値ならびに有意差検定を求めた。

4. 研究成果

埼玉県某市町村の公立小中学校、東京都内の私立小中学校、横浜市内の私立中高への3カ年の追跡調査では、児童・生徒4735人にみる日常生活での障害者・マイノリティへの対応12項目におけるリバース・インテグレーション体験者別に、「見たことがある」（知識・理解）、「手伝おうとしたことがある」（関心・意欲）、「手伝ったことがある」（態度・行動）にかんして、それぞれでクロス集計値とカイ二乗値ならびに有意差検定を求めた（図2参照）。

全体的傾向では知識・理解に応じる「見たことがある」の出現率である。最も高い項目は第5指標「車いすを使っている」96.4%、次いで第11指標「外国人のかた」93.1%、第9指標「妊娠マークをつけている」91.9%、第1指標「片手で杖を使っている」81.5%、第4指標「白杖（白い杖）や杖を使っている」76.8%が続き、低い項目では第3指標「義手をつけている」18.8%、第12指標「LGBT（多様な性）」27.9%、第8指標「酸素吸入器をつけている」36.3%であった。注目すべき視点はいずれの項目でも有意差が確認され、第5指標「車いすを使っている」での知識・理解のカイ二乗値に比べて、関心・意欲と態度・行動のそれがより大きく、体験群と未体験群の間に違いが明らかに認められる。

後述する追跡調査の妥当性と信頼性を検証する、教職員・福祉職員1200名を対象とした日常生活での障害者・マイノリティへの対応12項目におけるリバース・インテグレーション体験者別に、「見たことがある」（知識・理解）、「手伝おうとしたことがある」（関心・意欲）、「手伝ったことがある」（態度・行動）にかんして、それぞれでクロス集計値とカイ二乗値ならびに有意差検定を求めた。1200名のうち、障害者スポーツを体験した者は224名（18.7%）にとどまり、

児童・生徒における 40.6%とくらべ、参加割合に大きな違いが確認できる。リバース・インテグレーションの思想や実践的な試みが近年の試行的な事業であり、この 18.7%をいかに評価するか、拙速な判断を避けたい。

全体的傾向では知識・理解に応じる「見たことがある」の出現率である。最も高い項目は第 1 指標「片手で杖を使っている」95.1%、次いで第 11 指標「外国人のかた」92.9%、第 5 指標「車いすを使っている」91.8%、第 4 指標「白杖（白い杖）や杖を使っている」71.8%が続く。一方で児童・生徒の上位にランクした第 9 指標「妊娠マークをつけている」56.6%にとどまり、他方では第 8 指標「酸素吸入器をつけている」は 54.9%に上る。低い項目では第 3 指標「義手をつけている」13.6%、第 12 指標「LGBT（多様な性）」32.0%、第 2 指標「義足をつけている」32.9%であった。

同じく追跡調査の妥当性と信頼性を検証する、一般・学生 1200 名を対象とした日常生活での障害者・マイノリティへの対応 12 項目におけるリバース・インテグレーション体験者別に、「見たことがある」（知識・理解）、「手伝おうとしたことがある」（関心・意欲）、「手伝ったことがある」（態度・行動）にかんして、それぞれでクロス集計値とカイ二乗値ならびに有意差検定を求めた。1200 名のうち、障害者スポーツを体験した者は 210 名（17.5%）にとどまり、児童・生徒 40.6%や教職員・福祉職員 18.7%と比べて参加割合が小さい。


この低い体験比率は児童・生徒や教職員・福祉職員にみる全体的傾向と異なる。知識・理解に応じる「見たことがある」の出現率では、最も高い項目は第 11 指標「外国人のかた」92.2%、次いで第 5 指標「車いすを使っている」87.3%、第 1 指標「片手で杖を使っている」80.7%、第 4 指標「白杖（白い杖）や杖を使っている」72.0%、第 9 指標「妊娠マークをつけている」64.7%、が続き、低い項目では第 3 指標「義手をつけている」8.8%であった。

その上で、本研究の主軸となる障害者スポーツを体験した、横浜市立小中学校の児童・生徒（1922 名）への 3 か年調査を取り上げて、教職員・福祉職員（224 名）、一般・学生（210 名）と、インクルーシブ・スタンダード 12 項目の知識・理解、関心・意欲、態度・行動を比較検討した（図 3 参照）。第 1 指標「片手で杖を使っている」では知識・理解と関心・意欲では 3 者間に有意差は認められないが、態度・行動では職員・福祉職員 41.5%、一般・学生 26.7%、児童・生徒 16.2%の違いがあらわれ、有意差を確認できる。実際の手伝い風景を思い描けば、児童・生徒がいかなる手助けを申し出るのか、実践的な訓練が必要となるのだろう。これに比べれば、福祉系の職員には日常的な行動となり、むしろ一般・学生の参画率 26.7%は 4 人に 1 人が何らかの手伝いを申し出ている、と理解でき、共生社会の基盤を提供する。この第 1 指標にみる 3 者の関与割合の傾向は第 2 指標「義足をつけている」、第 3 指標「義手をつけている」、第 4 指標「白杖（白い杖）や杖を使っている」でも確認できる。

これらの傾向にたいして、第 5 指標「車いすを使っている」では教職員・福祉職員の関与割

1. 片手で杖を使っている。			
	こういう人を…	どちらかえらんでください。	
	1. 見たことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手伝おうと思ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	
3. 手伝ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	

2. 松葉づえを使っている。			
	こういう人を…	どちらかえらんでください。	
	1. 見たことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手伝おうと思ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	
3. 手伝ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	

3. 妊娠マークをつけている。			
	こういう人を…	どちらかえらんでください。	
	1. 見たことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手伝おうと思ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	
3. 手伝ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	


4. 車いすを使っている。			
	こういう人を…	どちらかえらんでください。	
	1. 見たことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手伝おうと思ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	
3. 手伝ったことがわかりますか？	1. はい	2. いいえ	

図 2. 日常の障害者への対応

合が非常に高いが、関心・意欲では児童・生徒 69.9%と一般・学生 68.1%、態度・行動では児童・生徒 34.3%と一般・学生 38.6%と同じ関与水準を示した。また、第9指標「妊娠マークをつけている」の知識・理解では児童・生徒 85.4%、教職員・福祉職員 65.2%、一般・学生 76.2%、関心・意欲では児童・生徒 63.8%、教職員・福祉職員 50.0%、一般・学生 59.0%、態度・行動では児童・生徒 36.4%、教職員・福祉職員 38.8%、一般・学生 39.0%を示し、知識・理解と関心・意欲では有意差が確認できないが、態度・行動では有意差を確認する特異な関与が明らかになる。

障害者スポーツを体験していない児童・生徒 (2813名)、教職員・福祉職員 (976名)、一般・学生 (990名) を取り上げて、インクルーシブ・スタンダード 12項目の知識・理解、関心・意欲、態度・行動を比較検討した。最も注目できる傾向は児童・生徒の関心・意欲が教職員・福祉職員と一般・学生のそれをすべての項目において上回る。この関心・意欲におけるカイ二乗値を手がかりとすると、第3指標「義手をつけている」 $\chi^2=217.948***$ 、第9指標「妊娠マークをつけている」 $\chi^2=195.762***$ 、第2指標「義足をつけている」 $\chi^2=178.483***$ 、第10指標「盲導犬を連れている」 $\chi^2=156.694***$ など、児童・生徒の関与が著しく高い傾向が確認され、成人に比べ強い意欲や関心を持っている現況を示す。

一方で、高い知識・理解と関心・意欲を示しながら、実際の態度・行動に反映できない第10指標「盲導犬を連れている」が表中では際立つ。知識・理解では児童・生徒 48.2%、教職員・福祉職員 44.3%、一般・学生 41.7%、関心・意欲では児童・生徒 28.1%、教職員・福祉職員 13.1%、一般・学生 12.6%にたいして、態度・行動では児童・生徒 3.2%、教職員・福祉職員 3.6%、一般・学生 3.3%を示し、知識・理解と関心・意欲では有意差を確認できるが、態度・行動では有意差を確認できない。

本研究では令和元 (2019) 年度から令和3 (2021) 年度の3カ年にわたる追跡調査を実施し、障害者スポーツ経験による、日常での障害者への対応の変化を確認し、その変容の指標の妥当性の検証を通じて、インクルーシブ・スタンダードを開発・検証した。初年度となる令和元 (2019) 年度には、横浜市立小中高等学校での障害者スポーツ体験出前授業を開講し、その体験者の変化を3カ年にわたり追跡し、対照群には、埼玉県内公立小中学校、東京都内私立小中高等学校、横浜市内私立中高等学校の児童・生徒に求め、その変化を追跡した。この対照群では、横浜市立小中高等学校における障害者スポーツ出前授業を開講していないが、フォーマルにしるインフォーマルにしる、障害者スポーツ体験 12項目への回答によって、体験群に参入して分析した。同様の視点で、Web調査 (教職員・福祉職員 1200名、一般・学生 1200名) においても、障害者スポーツの体験群と未体験に分類して、比較検討した。これらの比較分析によって確認される妥当性と信頼性を通じて、より明白な2件法による障害者・障害者スポーツ認知・意欲・行動調査票がインクルーシブ・スタンダードの開発に十分に資すると判断される。

1. 片手でつえを使っている。		
こういう人を…	どちらかえらんでください	
1. 見たことがありますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手振おうと書ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ
3. 手振ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ

2. 松葉づえを使っている。		
こういう人を…	どちらかえらんでください	
1. 見たことがありますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手振おうと書ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ
3. 手振ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ

3. にんしんマークをつけている。		
こういう人を…	どちらかえらんでください	
1. 見たことがありますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手振おうと書ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ
3. 手振ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ

4. 車いすを使っている。		
こういう人を…	どちらかえらんでください	
1. 見たことがありますか？	1. はい	2. いいえ
2. 手振おうと書ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ
3. 手振ったことがありますか？	1. はい	2. いいえ

図3. 障害者スポーツへの対応

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 海老原修
2. 発表標題 障害者スポーツのリバース・インテグレーションによるインクルーシブスタンダードの開発
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 海老原修ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 杏林書院	5. 総ページ数 217
3. 書名 現代社会とスポーツの社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------